

日本の文学

79

名 作 集(三)

中央公論社

日本の文学 79

©1970

名作集(三)

昭和45年9月5日初版発行
昭和48年7月30日4版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

綱の上の少女	片岡鉄兵	7
橋	池谷信三郎	23
渦巻ける烏の群	黒島伝治	44
軍隊病	立野信之	65
あの道この道	十一谷義三郎	83
三月変	岡田三郎	108
ブルジョア	芹沢光治良	132
鳥羽家の子供	田畑修一郎	170
あすなろう	深田久弥	195

光の中に	妻	鶯	南方郵信	風の中の子供	城外	コシヤマイン記	いのちの初夜	白い壁	垂水
金史良	北原武夫	伊藤永之介	中村地平	坪田譲治	小田嶽夫	鶴田知也	北条民雄	本庄陸男	神西清
467	434	407	384	325	305	280	255	229	219

注 解
年 譜

口 絵
挿 画

小田切秀雄

「いのちの初夜」

生野敬明

「綱の上の少女」「橋」「渦巻ける鳥の群」「軍隊病」「あの道この道」「三月宴」

朝倉 撰

「ブルジョア」「鳥羽家の子供」

「あすなろ」「垂水」「白い壁」

「いのちの初夜」

生野敬明

「コシャマイン記」「城外」「風の中の子供」「南方郵便」「鶯」「妻」「光の中に」

三芳悌吉

名
作
集
(三)

綱の上の少女

片岡 鉄兵

上

街の夏祭りを当て込んで、このごろ来ていた軽業師かろうしの中に、私の妹がいるという事実は、私をひどい憂鬱ゆううつに陥し入れてしまった。

生まれつき空想家の私は、これまでの二三年間、幾たび、妹をそうした境遇から救い出そうと考えただろう……けれども、私はどうすることも出来なかった。私は貧しい少年職工にすぎなかったし、彼女はいつも旅から旅を放浪して歩く巡業団の中のひとりだったのだから——私は、どれだけ彼女に逢いたくても、いつどこで彼女たちが興行しているのかも知らなかったし、また、この三年足らずの間には、たまには彼女が属する「山谷興行部」の巡業先を知る機会があったとはいっても、私

にはその土地まで行く旅費のあろう道理がなかったのだ。

彼女はそんな身の上にならなければならなかった——これは、彼女が誘拐されたというようなことがあったわけではない。私の父が、そうした興行師に、彼女を売ったのである。私の父は、どういう性格の人間であって、また、どういう生活や職業を渡って来たものであるか、それは確かに不潔で、惨めであつたろう、そして、それは父の罪ではなくて、この世の中の出来上りのさせた罪であつたかも知れない、それゆえ、私は父がどんなことをした男であつたろうとも、父を責める気持ちにはならない。しかし、父が、私の妹を軽業師の手に渡したという一事だけは、許すことが出来ない。私はそれを想うたびに、父を呪い、父を憎まずにはいられないのだ。これは私の不当に科せられた刑罰である、不幸である、父を憎まずにはいられないということ……だが、その父はもうこの世にはいない。十年前に、死んでしまった人である。

もう十一二年も前のことである。そのころ、私の一家は神戸にいた。私にはひとりの妹があつた。私たちの住んでいたところは、兵庫の貧しい裏通りであつた。だが、もう、遠い、遠い、昔のことのような気がする。私は、その裏通りについて、詳しい記憶を持たない。母が生き

ているころ、時々「兵庫にいた時……」と何か下らぬ思い出話をしたそのたびに、私は、漠然と、じめじめした小路の水たまりや、剥げた赤い布片れや、小児の喚き声や、何か怒鳴る筒袖の女たちを眼に泛べるだけであった。不思議なことに、そうして思い泛べる街の光景は、一度も明るい日光に照らされている姿では脳裡に出て来なかった。私の記憶にある兵庫の裏長屋の通りは、いつも、いつも、くろずんだ薄明りのうちに、煤煙にまみれながら横たわっている……

私が九つだったから、妹は四つか五つであつたらう。ある日、私は玩具のポンプを弄んでいた。そのポンプは父が買ってくれたのか、それとも、近所かどこかの子供を苛めて奪い取ったのか、私はおぼえていない。とにかく、黒い土の、わずかな空地に、鹽を置いて、私は黒い煤煙の流れる空を睨みながら、光る一条の水を玩具のポンプから飛ばしていた。そこへ、小さな妹がチョコチョコと走って来て、鹽を距てた私の真向いにしゃがんだ。私は、不思議に、しゃがんだ妹の無格好な物に反感を持った。そこで、いきなり、それを目がけて、ポンプの水をシューと射込んだ。妹がワッと泣き声をあげたので、母が表口に飛んで出た。

「まア、繁はまたふみを虐めよったな！」

母がそんな言葉で私を罵りながら、濡れてしずくの垂

れる妹の脚を前掛けで拭いているのを見ると、私は急に取返しのかね罪を犯したように考え、言いようのない恥を感じた。私は、何とか言い抜けなければ、このことで一生自分が汚辱にまみれるだろうという意味の、漠然とした感じから、真赧になつて、

「嘘や、嘘や、そら、ふみの小便やがな！」

「小便の臭いかい、これが！」

妹については、そういう記憶がある。そして多分、そんなことがあつて、間もないころだつたらう——ある日、いつも親子四人が寝る二枚の薄い蒲団の上に、私は小さい妹の姿を見失つたのである。

「ふみ、おらんがな」

と私は、背ろむきになつて寝ている母の背中に向つて言つた。

母は黙っていた。……

と、母の肩の上から、父の顔がぬつと現われ、私を見つて言つた。

「ふみは、もう戻つて来ぬ。あれは、他所の子になつたんのやから、もう戻つては来まいがな」

「他所の子に——」

その朝、どこからか、詰襟の服を着て、節くれだった丸い指に、幾つとなく大きな部厚な金指輪を嵌めた男が来て、ふみを連れて行つたのは、私も知っている、そう

だ、このことは不思議に、ハッキリとおぼえている、その男は、^い紅い、大きなゴム風船を持って来て、ふみにやった。それから、露路を去ってゆくその男の肩ごしに、ふみの小さな顔が、ニコニコと笑っていたのであったが、私はふみの顔よりも、ふみの顔の一尺ばかり上を、ゆらゆらとしながら遠ざかって行く紅い風船を、ぼんやり見送ったのを今でもハッキリおぼえている……

私の両親は、ふみは他所の子になったのだが、貰^{もら}われて行ったその家は、金持ちだから、安心したら好い、と私に言った。私はひどく悲しくなつて泣いた。声をあげて泣くと、母も一緒に声をあげて泣いた、すると父がひどく怒った。……それから二三日は、私はじつに淋^{さび}しかった。九つの子供は、しかし、まだ父を憎みはしなかった。その後、時々、妹に会いたくて、彼女が貰^{もら}われて行った他所の家に行つてみたいと言ひ出して、父母を困らせたものだ。すると、父母は、そんなときまったように相手の家が金持ちだから、行つたつて決してふみに会わせてはくれないと言ひきかすのであった。

「金持ちだから、あんな大きなゴム風船も持つて来たのじゃないか」

そう言われれば、なるほどと、私は思った。

「金持ちだから、貧乏人を家に上げてはくれないじゃないか」

そう言われても、なるほどと思った。同時に、私は金持ちというものは、何というわけの分らぬ、鬼のような人間だろうと思った。私は金持ちが羨^{うらや}ましく、そして憤おろしかった。私の知らぬ世界にあるところの金持ちを激しく敬い、激しく呪^{のの}つた……

その翌年、父が死んだ。神戸から、母の故郷の中国地方のある街に、私と母とが移つて来たのは、私が十二の時だった。その間の私たち一家の暮しかたについては、想ひ出すのも身ぶるいがする……それはしかし、ここでお話をする必要はあるまい。そして、私は今から七年前に、小学をやめ、今の工場に職工見習いとして入つたのであった。十四の時である。

その間に、私は妹のことなどすっかり忘れていたと言つても好い。貧乏や、そのほかいろいろの、その日その日の生活——それは、生活であつて生活でない、一種の無限の苛^か責^ざであつたような月日は、私たちに、可哀そうな妹のことを想ひ出す余裕すら与えなかつたのであろう。生きることが、その日その日の苦患^{くわん}であつて見れば、苦患にこたえて、身悶^{みも}えするほかに生きる道はなかつたのだから。ところが、五年前のある日、私は突然意外なことを母から聞かされた。

「お前^{まへ}にや隠しておつたがな、ふみがこの間までこの街に来とつたんだよ」

「ふみが？」

私は驚いて訊いた。すると、母もハッとしたりように、口を噤んでしまった。

その時は今から考えると、母に死が迫っているのが、彼女自身の疲れた心には予知されていたのに違いない。

彼女は、その二三日前から病床にいた。妹について、私に真実を語ることを母に決心させたのは、そのおぼろな死の予感ではなかったかとも考えられる。久しく考えてから、母はようやく口を開いた。

「先月、あの夏祭に、軽業が小屋掛けしとったやろう。あれや。ふみは、あそこで綱渡りしとった……わしは逢うて来たぞな」

「どうして？ あれは金持ちの家にやったんじゃないか」

私は激しく昂奮して、詰るように言った。そこで、母は急に眼から涙をぼろぼろこぼし始め、それから金持ちにやったのではない、父が軽業の興行師に売ったのであることを告白した。

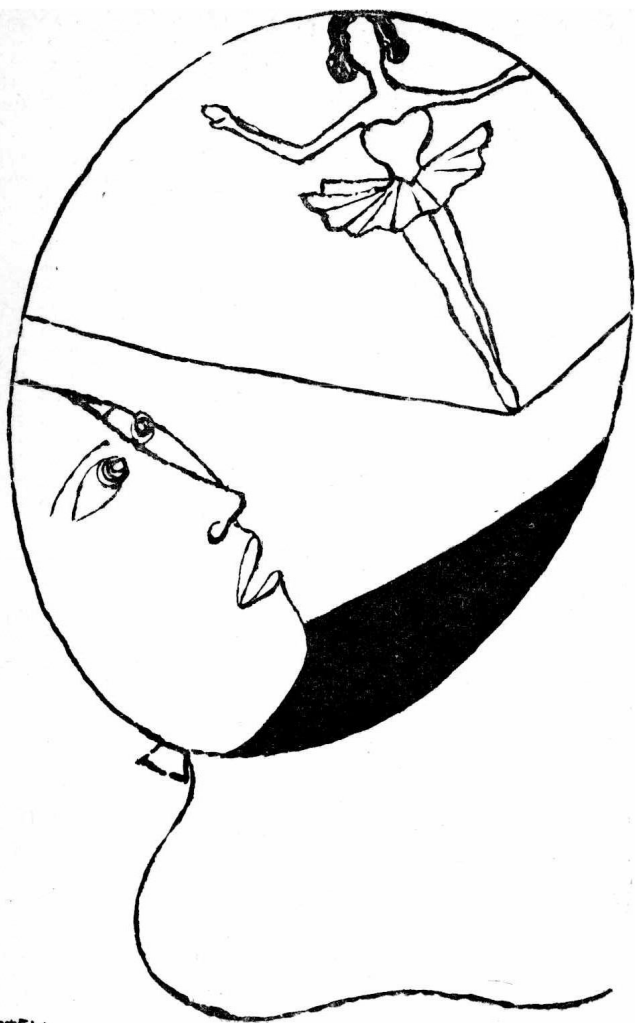
ふみを売ったのは、「山谷興行部」という軽業師の一行の親分であった。その親分は、どういう関係からか、母の昔の知合いだった。(これらの話は、母も話すのが不愉快そうだったし、私も厭だったので、あまり深く立ち入っては聞かなかった。)それで、父が娘をその男に

売ってしまったのである。

「親父に、なんでそんなことをさせたんや。阿母んも、阿母んやないか。軽業師に売るのは、女郎に売るのが同じことじゃ。売らなけれや、食えなんだのなら、家内一同、首をくくったらええのじゃ。どないしてでも生きて行かんなんという法はない。自分の娘を女郎や綱渡りに売るなどという考えを——どだいそんな考えが起るものじゃないんだ。この世の中にや、そんな考えが起るもんじやないとせんなんのや。そんなら、阿母ん、どんなに暮しに困ったって、そんな考えを退けてから方法を考えんならんのやろが……」

そのころの私は、まだ中学講義録もっていなかったし、雑誌や小説を読んだり、それから何よりも第一に、大崎さんのような先輩も持っていなかったもので、自分の思想を十分に母親に伝える言葉を知らなかった。私はひどく母を咎め立てて昂奮した。始終、あの、十一年前の、黒ずんだ朝の露路を、ゆたゆたと遠ざかって行った紅いゴム風船の記憶を眼に浮べながら……

しかし、私はその上母を非難しようとは思わなかった。父が売ると言った時、母はあらゆる方法をつくして反抗したのだという。母は泣いたり、罵ったり、死ぬると言って脅したりした。でも、父はとうとう売ってしまった、というのである。



SETSU

先月、その山谷興行団が来た。その時軽業の赤い大きなビラが、銭湯に掛かっていたのを母が見たのであった。母は無知で、文字は読めなかったのだが、山谷興行団のビラが、十年前のと同じ刷りであったのが、母の記憶を、刺激したのである。母は私に内密で、軽業の天幕に行った。そして、昔なじみの親方に逢った。無理にたのんで、娘に逢った……

「逢った？」と私は訊いた。

「よそながらに、なア」と母は泣きつづけるのであった。よそながらにでなければ、親方は逢わせてくれなかったのである。

「あれが、お前さんの娘さ」

場内一杯の人ごみの中に、親方は母を引っ張って行った。そして、高いところを指さした。高いところの綱の上である。十二三の小娘が、ビロオドの肉襦袢にくじゆばんをきて、いま綱の上に右の脚をビンと伸ばして上げた瞬間だった……

「あれが……おお」

母は袂で眼をおおうた。

「好い、きりょうだろう。喜ぶが好い。人気者だよ、あれ、あんな花環はなわや、ほら、あんな幟はたけやら……な、敷島はつせ嬢へと書いてあるだろう——字が読めんかね、お前さんは。ハハハハ」

そんなことを親方が説明してくれたのである。母は、親方が指さすままに、そつと顔を持ち上げて、「そら、あんな花環を」と言われれば花環を、「ほら、あんな幟を」と言えば幟を、ふるえる空気の底に、順々に眺め渡した。上を見る気にはなれなかった。敷島はつせ、敷島はつせ、と、心の中に飲み込むように繰り返しながら、母は、花環を、幟を、順々に、そつと眺めたのであった。花環を、幟を、そして幟を、花環を、眺めている間に、ああ、幟から花環に眼を移すその間に、自分の娘は高い綱の上から落つこちるかも知れない……もう娘は持ち上げた脚を綱に戻したのかしら？ 今、落っこちて来はしないかしら？ ああ、チラと見た顔の、細い眉、張り切つて凝る眼、固くむすんだ唇、花環、幟、敷島はつせ……

私はその時の母の気持ちだが、そのまま自分の胸に、こたえて来るのを感じた。そして、私自身が、敷島はつせ、敷島はつせと心で繰り返しながら叫んだ。私自身が、高い綱の上で、ビンと持ち上げた脚を見た。細い眉を見た、一とところに凝った眼を見た、花環を見た、幟を見た……幻でなく、さながらに母の話の中にそれらの物を見たような気がした。母は言った。

「なあ、繁や。どうぞして、ふみをあそこから連れ戻る工夫はないだろか」

「そんなこと——それよりか、こっちの身の上のことの

方が忙しいがな」

そういった私の心は、嘘ではなかった。私はほんとの心持を、苦りきって言い放つほかはなかった。自分自身らが生きるために忙しいのに、どうして今は他人同様にかげ離れて月日のたつ妹のことなど構っていられよう。私がそれを冷やかに言うのを見て、母はすぐ黙ってしまった。

母の死んだのは、その後間もなくである。

それから五年間たった。私はその間に、多少仕事にも熟練し、日給も上って来た。それに、母に死にわかれてからは場末の安宿に暮す独り身である。私は下らぬことに金を費さなかった。中学講義録もとれば、雑誌も読み、人から借りて小説も読むようになった。そして大崎さんが、私の思想をスッカリ変えてくれたしまった。だが、私は大崎さんに感謝こそすれ、決して大崎さんを知るようになったことを怨んでも悔いてもいない。大崎さんについては、また後で、もっと詳しく話すことにしよう。

とにかく、私はこの二三年間、妹を救い出すことをいろいろと空想もし、計画も立てたのである。初めは、妹のことなど忘れて（それは少しも不自然ではなかった）いられたのが、だんだんそうでなくなった。次第に私は、山谷興行部の、敷島はつせなる、まだ見たこともない女軽業師が、私の心の中に色の濃い存在となって来だした

のを知った。女軽業師、敷島はつせ嬢。

「彼女は俺の妹だ」

この考えは、最初のうちは、しかし、まだ空漠たる空想のように頭に来るだけだった。それが、だんだん胸を打つ実感として感じられて来た。

すると、私の妹が、高いところの綱を渡っていることが、時々、幻想でなく、いつの瞬間にもあるであろう事実となって、私の心を痛めつけた。

美しい女！ 妖しい魅力！ 綱の上……

彼女は私の妹だ。私の妹が、可愛い、この世にたった一人の肉親が、あの、昔私がポンプで濡らしてやった妹が、紅い風船につり下げられた可愛い女の子の顔の主が、いつもいつも高いところの一本の綱を渡っている！ 私の妹はいつその綱から落っこちて死ぬるか分らないのだ、彼女たちの興行団は、いまどこで天幕を張っているのか知らない。あるいは九州の果てで、ひょっとしたら北海道の片田舎で、今、この瞬間に、いや、次の瞬間に、彼女が高い綱の上から落下して死なないとは、どうして言えよう。それゆえに、私は、いま、この瞬間に、いや、次の瞬間に、ひやッ、ひやッと脊がさげずにはいられないのだ。いつの瞬間も、彼女は、生命を脅かされている。それゆえ、いつの瞬間も、私は遠い知らぬ他国の空の、一本の綱を踏みしめている妹の生命を安心

することは出来ないものであった、そのような三年間であった。

「ひょっとしたら、俺は敷島はつせを恋しているのかも知れない！」

ある日、私はそう思った。そして、自分で顔を赧らめずにいられたかった。私はもう二十歳になる。私は寂しい少年である。私は異性の友だちを持たない。友だち以下の何のつながりすら、私は異性に持たないのだ。私が妹についての悩みは、私の性欲の成長につれて深く、激しくなっていた。私は、ほかに何の対象もないから、見も知らぬ敷島はつせについて、冒険を空想し、苦痛を享楽しているのではあるまいか？ この考えは、私を非常に寂しく不愉快にした。それゆえ、私はそんな考えは、頭から努めて振り落そうとした。次ぎに、

「考えて見ると、俺の悩みは、俺が生活に余裕が出来、知識が加わって来るに従って成長して来た。これは何と云うことだろう」

これは確かに発見であった。私はこの発見の前に眼を腫らして、そして私の手や足を、他人の物でもあるかのよう、今さら、物珍しげに見つめたのである。

そういうときなのだ、山谷興行団の一行が、この街の夏祭りをあて込んで、乗り込んで来たのは。ビラで見ると、その中には確かに敷島はつせもいる、そのことは私

を不安にし、同時に憂鬱にした。そして、一種、もの懐かしい悲しみとも、不思議な懐れとも言えぬ心の憔悴が、私の胸を一杯にした。

だが、物語の前置きは、もういい加減に切り上げるとしよう。このような長い前置きよりも、私は、次ぎの、非常に短い本題を語ることに、一層の焦燥をおぼえているようだ。

下

夏祭りの季節となって、街のなかほどを流れる青い水に沿う河原には、さまざまな見世物の小屋や天幕が、うすきたない白さに連なり、重なり合って建てられた。機械人形や、手品や、シネマや、アルコオル漬の仔や……それらの見世物の中に、あの「山谷興行部」の天幕は一際大きく、高く聳えていた。天幕のまわりに、色彩を散らす旗と幟、そしてコルネットに引かれて青い大河を渡り、対岸にまで拡がってゆくバンドの響きは、街の四方から人の足を吸い寄せていた……忙しい夏の夕ぐれは、祭りの群衆が刻々に厚みを増して行くに従って、次第に闇をふかめて行く……

私は貧しい少年職工であった。河原に渡る橋の上まで来て、私は泣きだした。私の眼の前を、おびただしい群衆が、かるい足どりで祭りへ急いでいるのである。